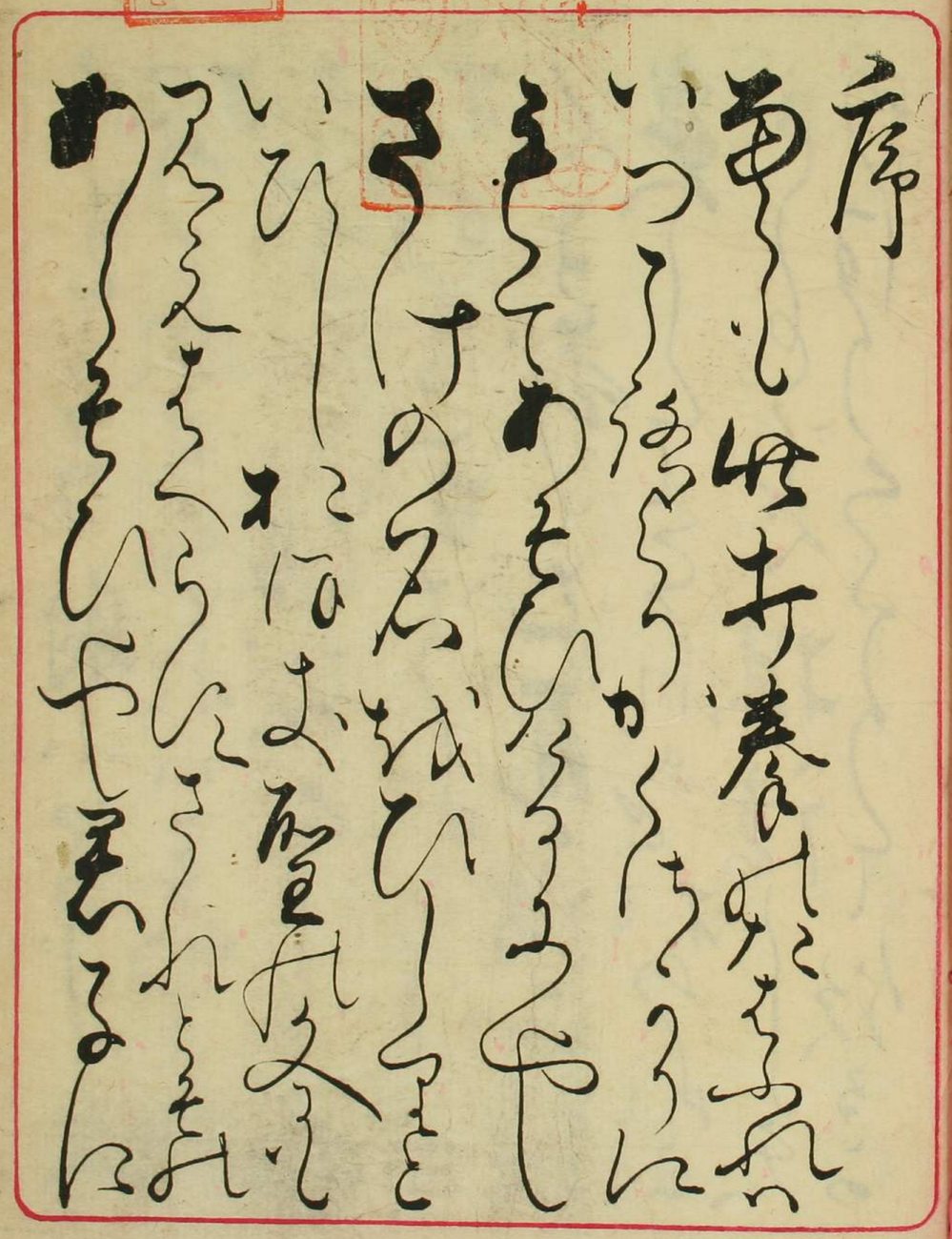
拳會角力圖會

上

ヲ多9
30
1

勢ヲ門
號30
巻1



拳會圖會

編者 義浪 吾雀

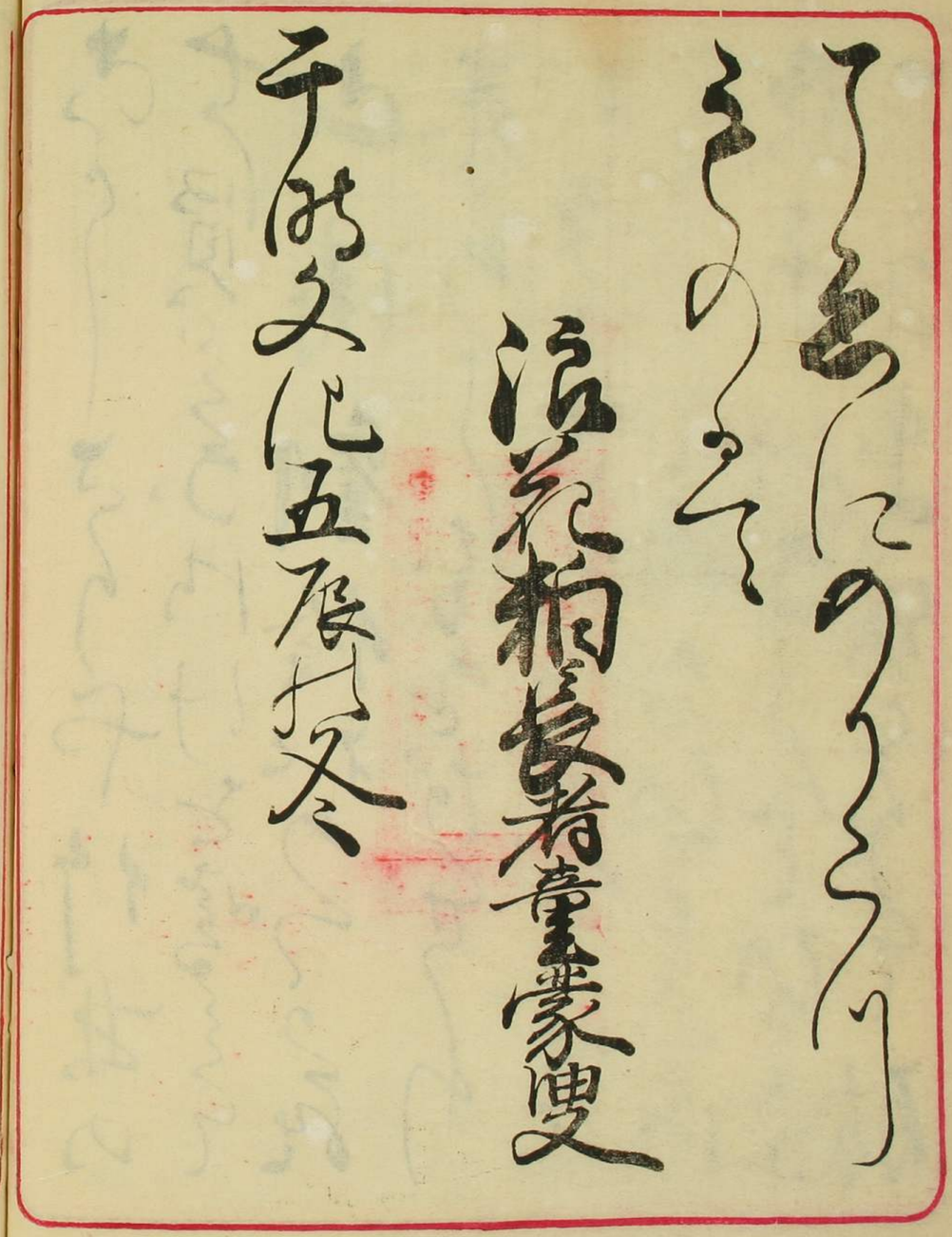
畫工 柏好齋

華本文昌堂壽梓

しても弓射小笠久
につれまゐらせつの趣
思ひて沼紙くして既
おめきかてぬれ達して
人ゝ香も互習露にて
是してこれをそのれは
ともかくし揖譲し矢
のほりくりて飲るこの

さてもさりや竹林の
七賢は清けを嗜みて
山濤劉伶などの徒
巻の書をなせり
かゝるものにも奏は賢に
まして酒のひしほに
亜きみちんとひたるに
さらのまま紙とりて賦

遠藤文休樓主人
北久宝寺町筋入
枝屋珍郎筋東入
元禄本文昌堂



拳會角力圖會　上之巻目録

○行司演右之事
○行司仕様之事
○行司意得之事
○初心打習仏得之事
○相手に向ひ打時仏得之事
○指一本ゟ五本迄出ス云々之事
○地打稽古之事
○土俵勝負拳之事
○拳猶打ち見之事
○我指ゟ若要拳ゟ之事
○六ケ敷拳打仏得之事
○同指ゟ出ス事ゟ取ル事
○出物の打ヒ之事
○平ヒ　押ヒ之事
○長寿ゟ見渡ス大坂ゟ小倉ゟ
すくひゟ拳に向ひ仏得之事
○相手ゟ押ス之事
○表裏之事

同

○下之巻目録

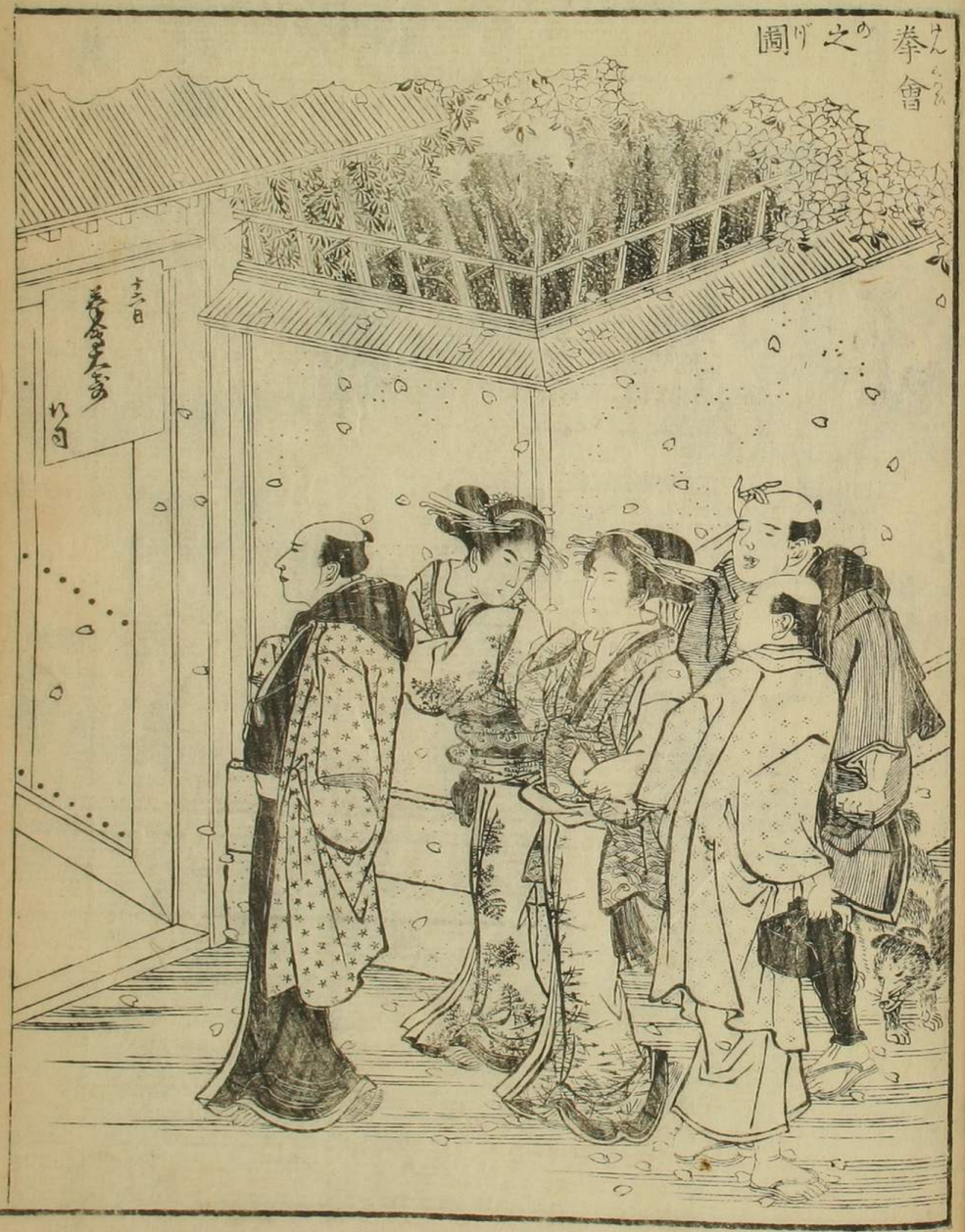
○唐音之事　附盃觴
○拳五行心之事
○拳ゟ己ゟ拵ル事
○初拳ゟ勝拳仏得之事
○右平拳之事
○七玉拳之事
○広屋拳之事
○出拳之事
○交拳之事
○育人拳之事
○虎拳之事
○浪華拳術方細ク表附

凡例

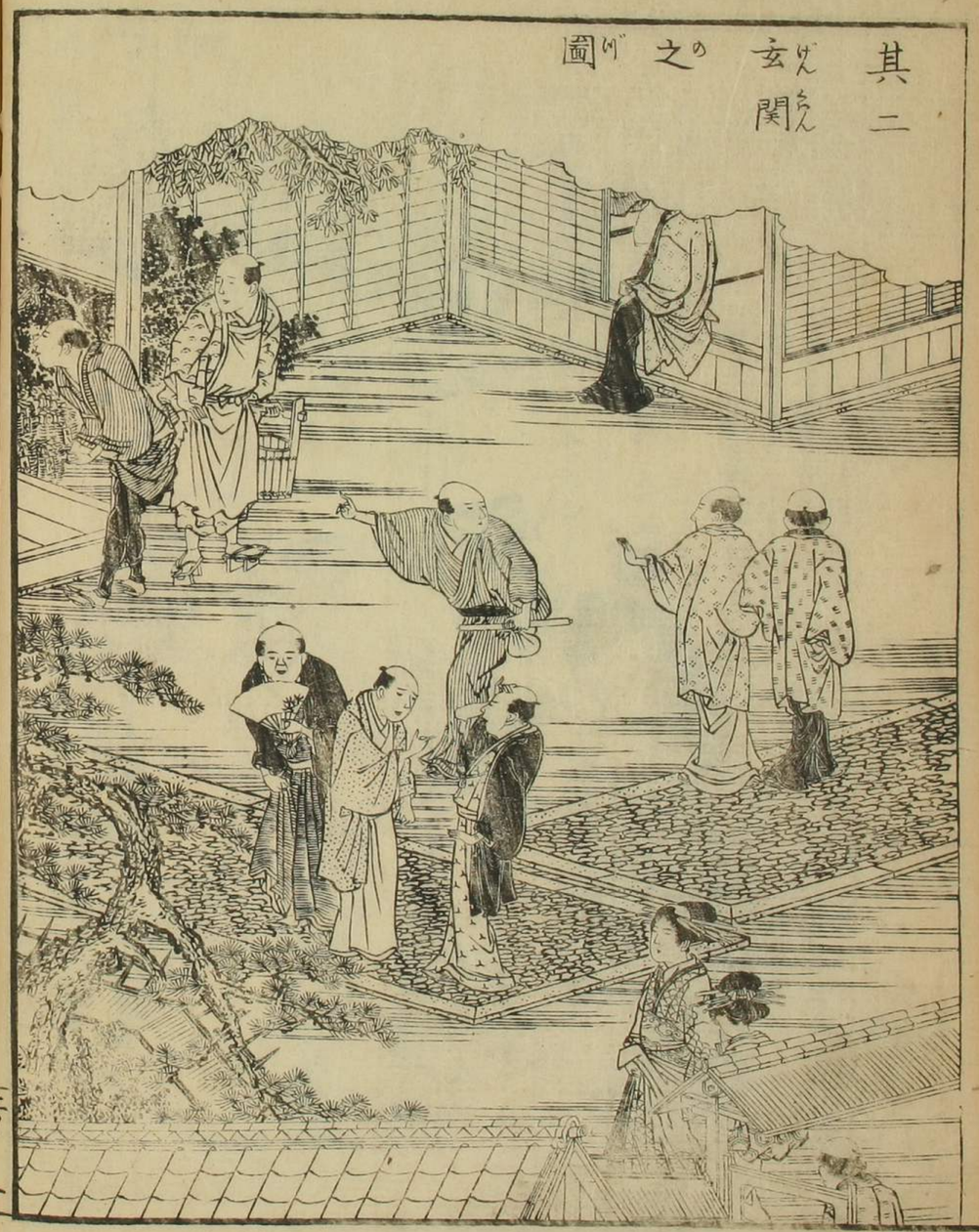
一　はんぐわつの拳会を行ひて安ふ弘くれど其事なるを事成いて
どれど初ふうするひ終て寒に今宵にあつまれ
ぬのかて浪花の義浪　吾雀の両大人にて其業のくはしきを
一　編れ圖會まことに其事なるに方の作りとなりてひぐらふ人の
そなへこれいかにしぐ、
一　上達のはなはだしきにかつてこれ
一　所をほよ玉ゆ場所所ゆ名人の場もまぐ作成の寸
されば其引は早てみるをほ人の浅なるもいるべれど弟子にたつ
たまてに爾つ去い浪ふうて一巻もをつとめ

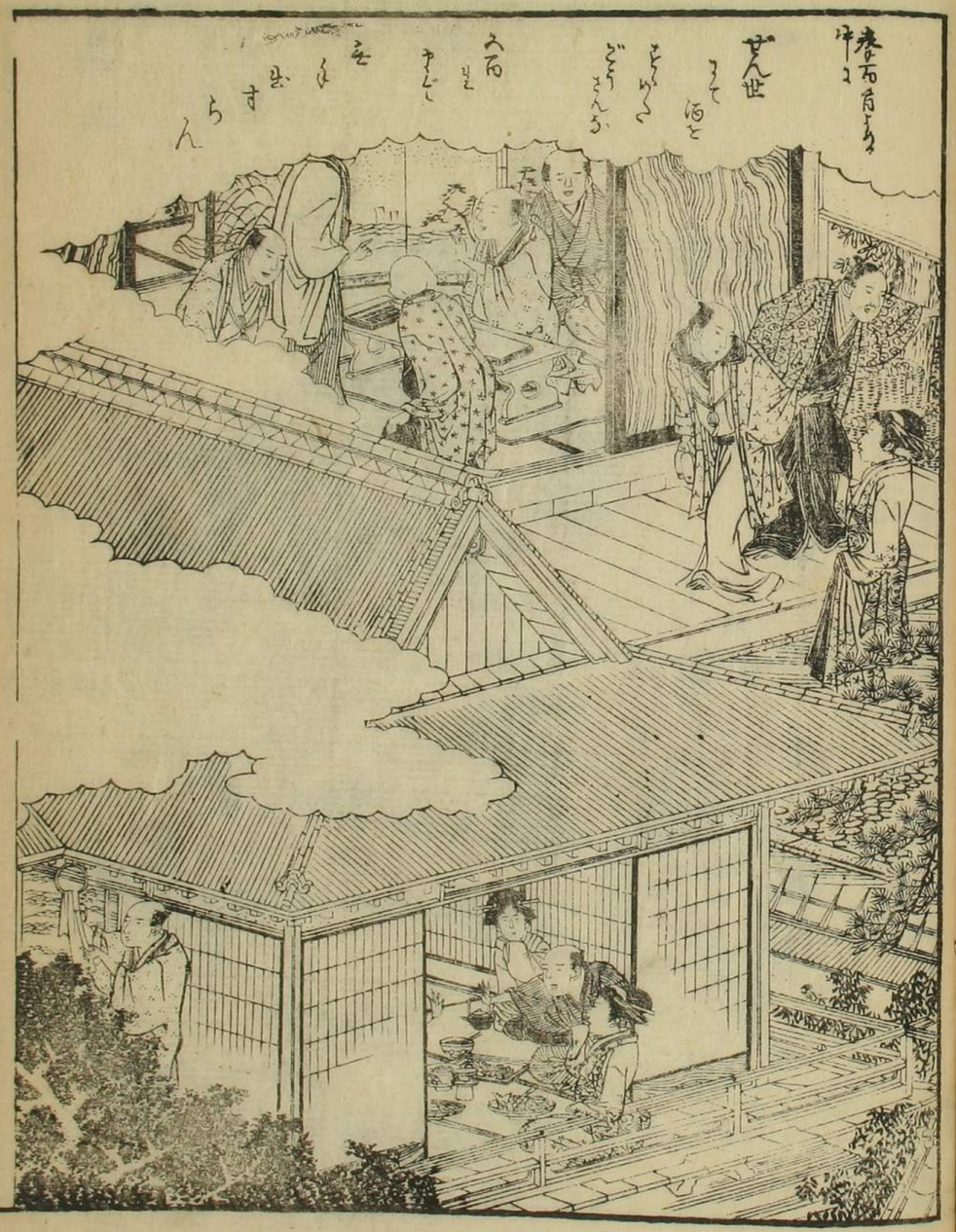
文化六己春

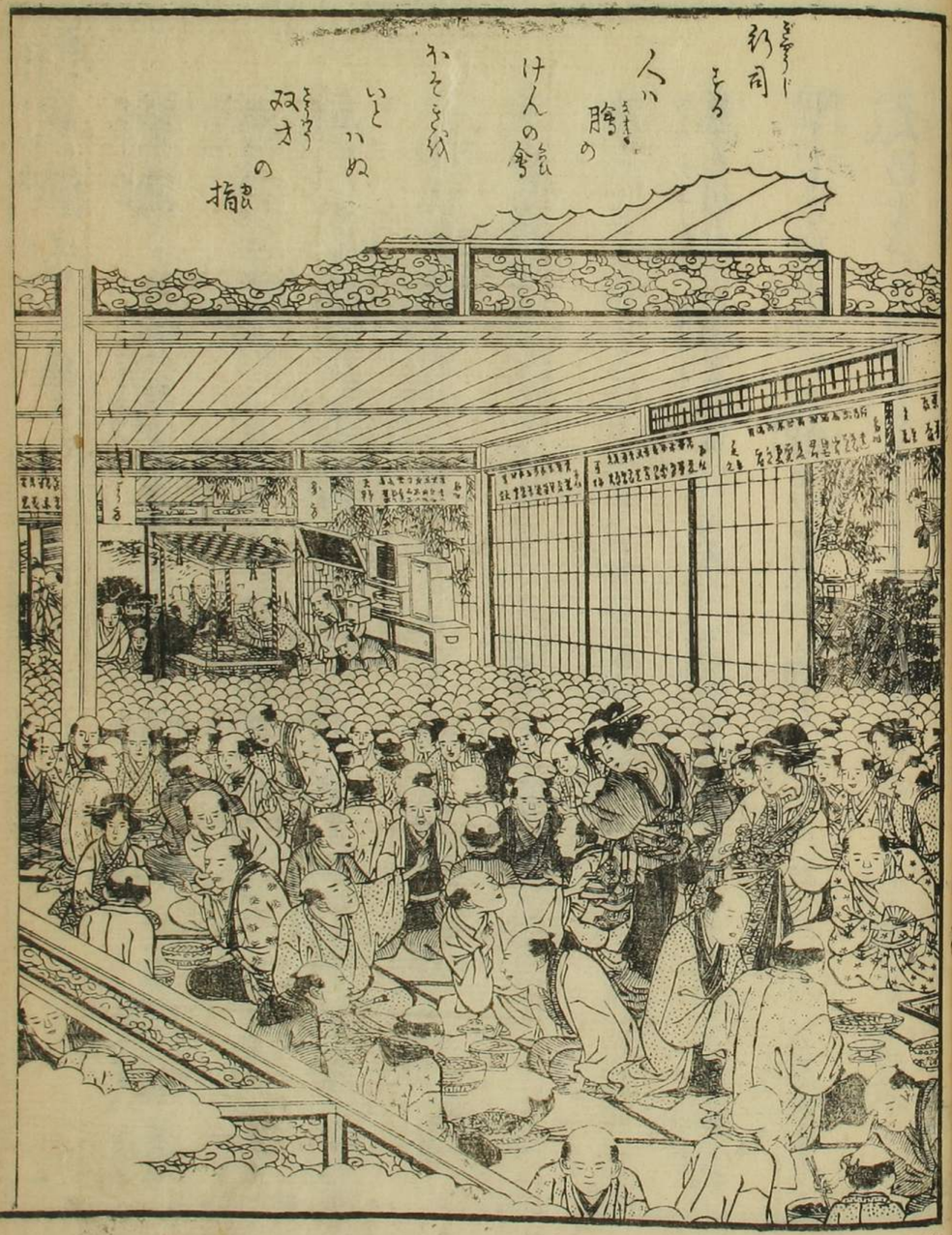
蓑集筆工　浅野高蔵誌



其二
げんくわん
玄関
の
之
ゑ
圖

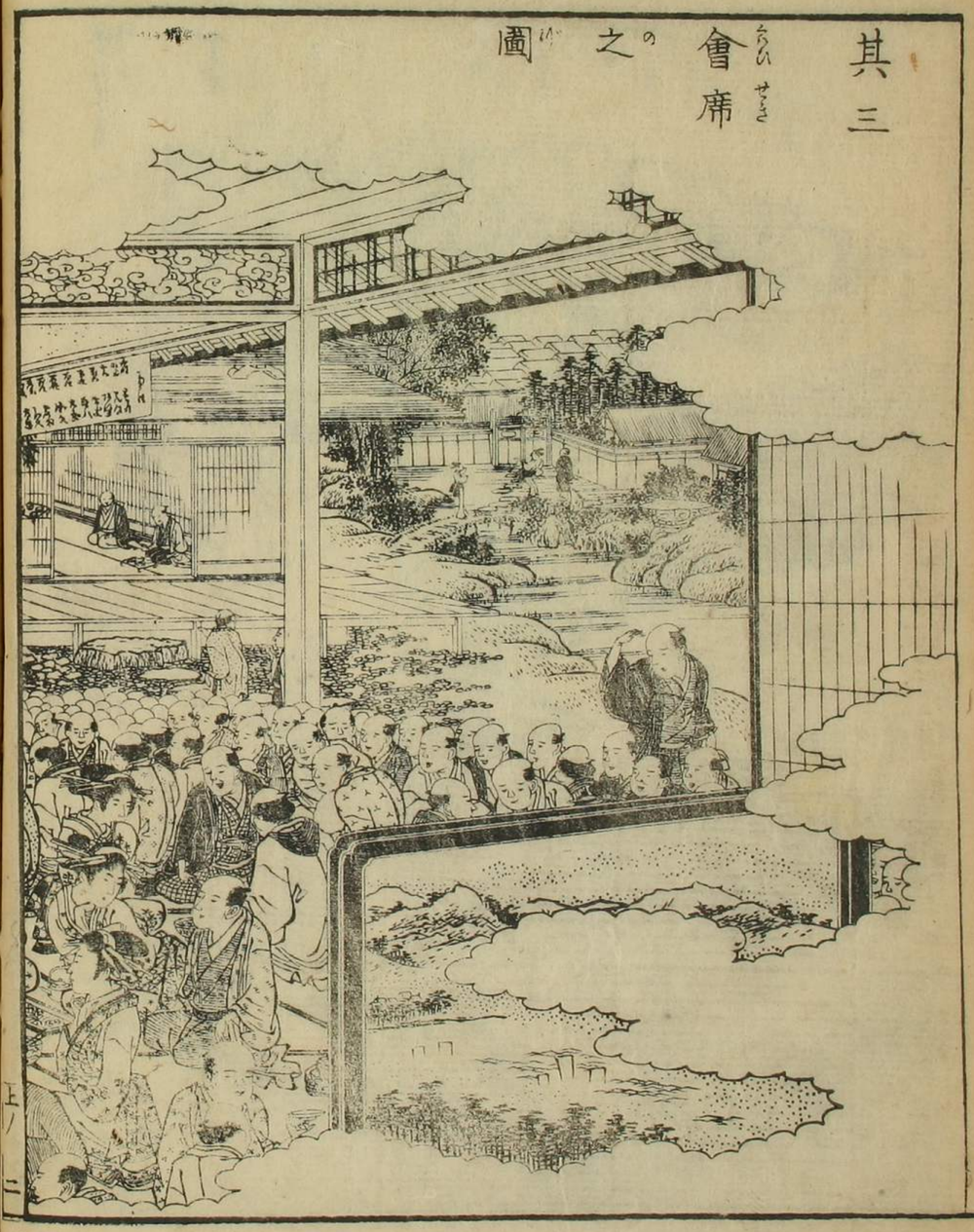






其三

會席の之圖



行司演舌之事

東西〳〵此所におきまして晴雨に拘らず一日拳
會法の手引を以て尚ぞるゝ其作法よろしからずして
ともすれバ御騒〳〵しく御見物に御出くださるまする
ぎやうかん會元何某ハ中〳〵におよびも組中の輪くかざり
ませぬもの〳〵しましていうぞりうの大變の色をなしたて
申けるまゝさつそく左右の力者力瘤ぞうけたまはるあいさ
拳角力の故実ぞうけたまはりまし御耳に觸ませバ皇に
かしこき御代の御遊びに海内平穏五穀豊饒の祭なり
天ひらけて四象あらはれ陰陽ありて万物生ずれども

拳ハまつりごとにぞもとづく其規模作法さへ、
角力となぞらへ酒席のたはむれ迄細かに手続の目付
まづ拳おこりを尋ぬるや宴に肥州長崎圓山廓の外紀
彼所の青楼に唐人あそびて宴ぞうけ遊女を招き
玉揃拜揃餐盤とかざりたて檻のまく小かハ八絃を法しけ床
の側まで並べおきしかしてかうひつるを唱ふる小八金鞁を
そろへ喇叭を吹き意氣を励まし チンタ 蒲萄の美酒
をくむ酒闌ハにおよんでの時唐人左右にならび礼儀
正しく上よりハ拳ひろめまつるあり下よりハ招ひ
のぼるありて火花を散らしうちたゝかひやがて肩をとる〳〵

なる家まいギヤてこの大器ゑ二三歩往ばくのこゝは
てらしろに退ぞく其行儀正羅なるもの実ゑ云徒
小述ぐこし今ゑよりゝ時陽拳の濫觴ゑなり扨其
時中うも手練達者の拳技みゝ多り出し武みゝに行
揚るものまい虎皮みゝ被　豹皮みゝ被　狂く緋ゑ羅　羅紗みゝ羅
まゝこい美女みゝおどきるゑぐゝの襞ゑ技出し　其揚屋を
みんと座中清らぐりあつりきうゝ美ゝきるゝ来席より
きゝみの唐人あらゝゑ出武みゝの達人技何の若もなく
ひろひまろり内席まて美人みゝひろひふけまてようを
みゝ拾のらぐゝ次ゑ則陰陽和合の雛なりゝゑに

閑ゝく真の角力の土俵ゑ阿吽の二字口あり阿ハ開て
酒技吾吽ゑ塞で吾ぬゝや唐玄宗皇帝の曰拳ゑ
酒席の一助たまぐ真に愛ゑぐきものなりかなゝ次
上達の閑取ゝ武拳ゝきるぐゝ次ゝや拳角力の
かゑ中も十六箇の土俵技布土いきるゝゝ又行の主に
して條の木火金水技巳方ゑ配る則四本柱ゑ
抜取ゑゝてゝ東西南北須弥にゝてい北い黄ゑ南い
青く東白西紅の漆ゑの山技ゝ巳ゑの絹技ゝて
幕上ゑゝ神明佛陀の御戸張ゑぐゝいゝなゝく
たゑあゝ次北いゝて其性黒く玄武なりゝゝ

行司演舌之図

易ニ曰君子終日拳くを
忘やう戻ハあれと
げに哲学

土俵之図

巻出し北うてとゝのゆえあらと号く実の角力る
ゆえ出て呼の声或叫とゝれもえ呼く十六儀
の布そるを土俵とゝ拳か一より十までれてゝ
勧進角力か八方正面拳のとゝゝる十方正面一より十迄
変あるゝゝ今備君子の初まるゝなまべ髪はじめゝ
うゝ番数のさまゝけもあゝませゝ付
もあらかじめまゝ左右の力者或ゝ世所一後より入
まゝゝる拳角力のゝ行司方五人ひゝの
変初のかゝゝ式或世角力或合寄

行司仕様ゝ事

紙司いゝて組ゝの名乗或ゝゝ拳角力の節出俵より

かゝゝ一通ゝ呼ゝて後拳土俵の東西より出ゝて
宮方と書ゝ張或ゝ式ゝ行司或はけ出ゝけの
方ゝ出ゝ一ゝ後ゝゝゝ
さて双方土俵よりゝゝ出ゝけの方ゝゝ名乗或あげて
其後ゝゝ陸ゝ名乗あげ角力或合ゝゝ
拳の数実盤龍のゝゝ拾ひの変初より行司或式合
と求る けおもむきまの角力
ゝ求ゝのお遣ゝ

行司意得ゝ事

行司或あゝゝゝ人第一より意得ゝゝゝ左右ゝゝ
指或ゝゝおぼえ行ゝゝゝゝゝゝゝ或ゝと

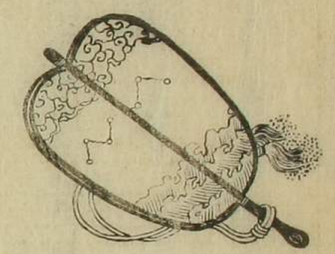
絹よりあらしたけ紙成もの〇〇ちゃうふくさたう紙
きちんぬやくよもくしいづみ左右ちゃふ法つまつんだびふ
てゑの合ぬちゃあり。其ぬ中ちてゑ紙つまづ左右へ化粧
紙成ちゃ決ぶども摩の横横なりさてきこ特と摩の
きてこ拳あり八いてるい成ぬく拳あり。ぶきこの一紀行司
のちゃかもごめいちゃくちゃ事あり。拍ふきちゃイヤりく
ちゃちゃいひて拳のてゑう一ちゃゑイヤ〳〵紙十ちゃい
いつ拳あり。さほどいやかちゃまちゃ知ちゃうぬごう
ちひとれのちゃのも伝おう。其余ちゃくもりうし紀拳の
あるのなれど行司の役いづまちゃもどんぶんきあご

ふきんぼうをせねばならぬちゃたとえ極意ちゃも
玉成あごむく汗成ちゃうし。我家業よりも大切ちゃて
眼さきちゃとせば拳ちゃうふちゃう成ちゃりし骨ちゃう
表のあけるもいとちゃば、勝負のちゃうで厳重ち相
法こちゃう事ありかくれぐく堅ち法ちゃめたりちゃて。
徒ありて絶張成ちゃるちゃめちゃれど我実成義
して武役成ちゃで行司の味あり。ちゃちゃう効あり。

物ち打習ち得ちく事

先初ちゃう拳成打ちゃふちゃんとおもて一ちゃ十ちゃの
ちゃ成おぼえ眼ちゃちゃちゃう揚技ちゃさちゃ行ちゃふち成

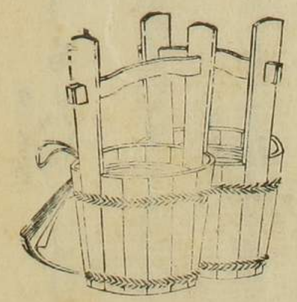
團之圖



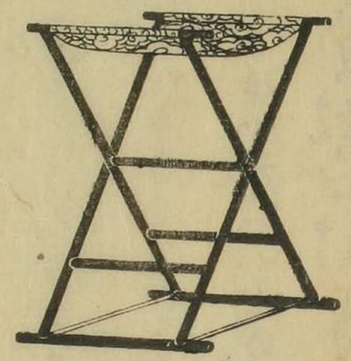
拳錦之圖

柏木之圖

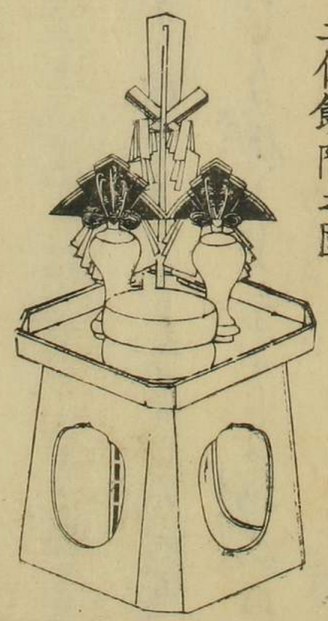
手水桶之圖



相引之圖



土俵餅附之圖



弓之圖

弦

ひとゝをとをとてだたくぶで相手のイツカウ拳をひ
ろ〳〵給まゝぶで。半一一本たてこひとぶべし。それ
イツカウ。リヤン。サン。スウ。ゴウ。リウ と警右を
もぶで。手登りとゝ〳〵癖ゆよるぶゝ リウ。ゴウ。スウ。
サン。リヤン。イツカウ とけいこをもぶで下るといゝ癖
付てよろしゝ。右の事のりぶぶりふあら
ぬやう。宵だゝに警右をぶべし。次よ相手のよく出る
指へ付うふゝかゝとれゝとゝよゝ給拳
法をゝる。考ごゝえの一なり。儀しあぶら初心の
うちへ。思案立夫拳をゝるようも。兵達者ようの事

だゝう拳をゝろぶけるが出ようし。甚云ふ。拳の解加
の地方ゆ神〳〵ゝふてゝ出ものしをおもゝして教ものぶ式ゆ日し。思案立夫ハト一達の後に
もぶべし。其中ゆ相手より先ゆ来るゆ拳我身ゆ方
込てゝのを。兼〳〵心ゆ給ふゆおぶれバ何日上ゆの場
ようゝゝふ事ふし。

○

拳い酒席のたいむまといでも。礼儀拳第一ゝも。礼儀
ゆきゝゝきゝゝ他の見物もようゝ〳〵ぶけぶべし。
多〳〵相手ゆむうひ。我方へ一拳打うけ二拳め拳
打うけふゝきに。ハるイふゝ〳〵ぶ加拳ふをゆ仰ゝる
云あゝ男ゆようゝぬ云業ふなるふ。女ふにゝ

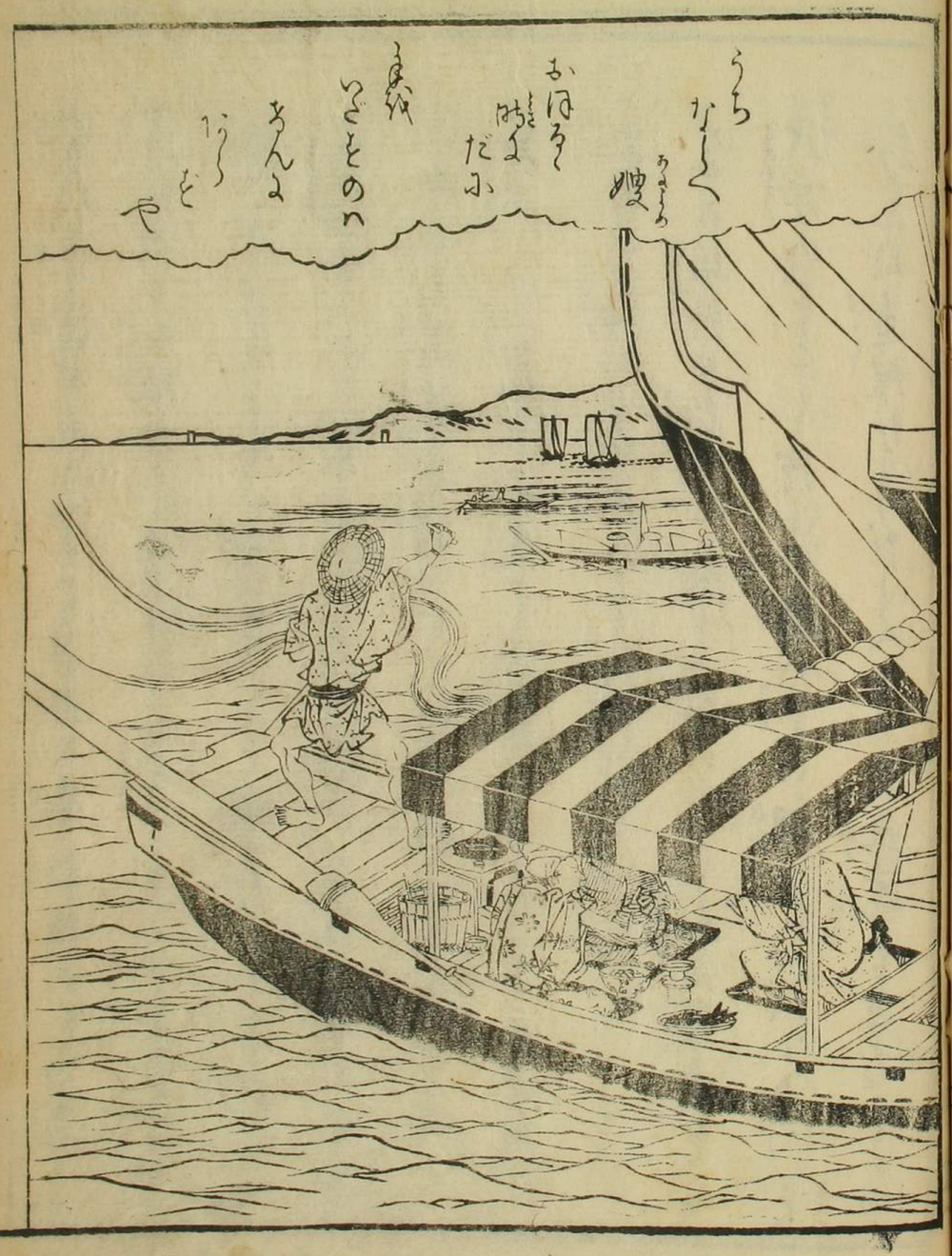
あつて。ゑすくるしきものなり。よくくかんごう
はしーむづきさるものなり。金ひ是ゑすあつてある悲元
らくばるあらばるらくるよ字ゑ其五ぐる。紙自ら意房紙引てとう。
角力取ぐう澤倒なりて。澤倒なるぐ いくしこと むしこう
すぐ。武角さるくおりし紙
事 あまこりう考ぐ心底し

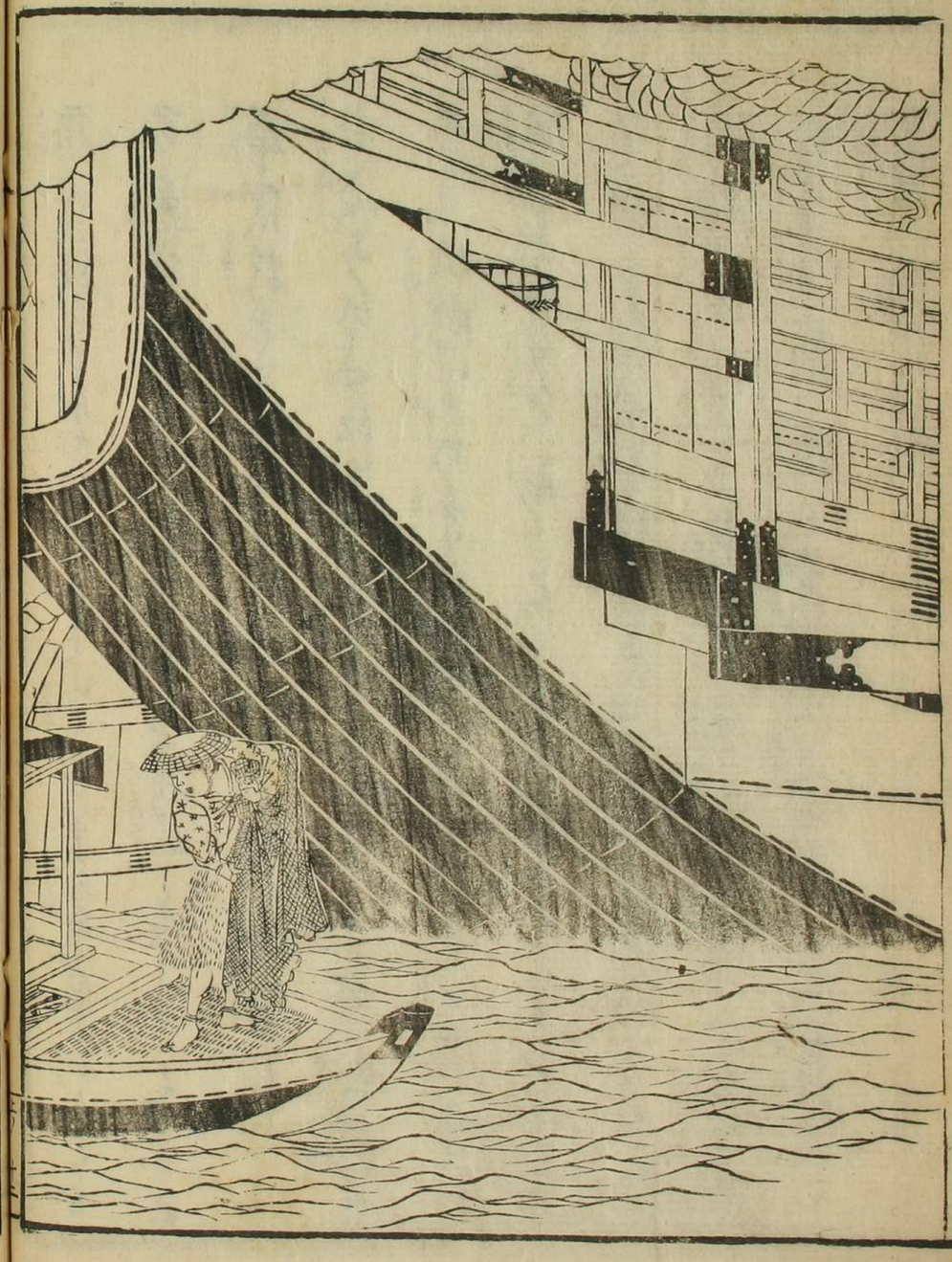
相手に向ひ打合時心得之事

相ゑむうひ打ここゑよく心紙ものを紙おうし法所。
ぞんぶん撻ゑして。他の事紙おもこ底。一心紙拳にゑせこ
うりぐしぞこしふてもかのこゑ紙おりくぐ得を少ら
事なうぐし只向人紙ゑうひしぐやうの心打出あり。
ここしこもも程をるゑ味あまこば其事法まて願てこの
なり。危角ゑまゑ紙もちて打ここゑ其事に系
じこゑ得あるぐし。

○惣じて未熟して弱き拳ばゑの癖をこくなぐゑ
かこうして一ヲ出せば。サン。スウようかのこゑ出ぐ。
五ヲ出せば。リウ。ゴウようはうのこゑの出ぐるこのあり。
危角我指の役く紙ぐゑゑ出こるの紙得こるゑ。
始終ゑの教ぐゑのゑ教こもふこくおくしてぐしうこ
出こゑゑの多きこのぐうう。我目ゑかうあうひゑ
かゑひ。押こどりこゑ。それ紙もちこ取ゑれうの
もあいぐぐ。ぐこうこうぐうこ向人へれのこうる。

見物のるる時こゝろ辣の上にてよく〳〵うんぞく立
まをまをぐし。
○中通りの拳はそれて早廣くて戻りふど多く
うけもれなり。見物の事もよく考ぐくうけ
居れ事なり。
○上手の拳はぐく手の癖も多くて居く。指の稽
ももつ見事大ひろこゝろはるぐき事あり。
熱じて拳我打ときは。相手百人よ向つて。百人も。
名く拳の調子の遠よものと知るぐし。
○相手の調子我ものふくとかんぞく其物を。不
物我こゝろにもつて此んの事変ぐよくもち
て遠我てあらせて打事を考一とぐし。あまと
拳我拵くうけるあり。よかくくく打事もあり。
打合あひくに先と合者よあるる事数多
あり。此時先の事我能くかんぞくて打ぐし。
此方より先く取ふくる我合者よもるる有
まくこの調子ばかりあるぐ。
なれべし。実る見物の事くいたふたぐ意味
あるものあり。深く考ぐく工夫なして。自分ふく
打給べし


うちなくく
おほろ
だふ
いざとの
きんよ
や



拳法上達せんとおもふ。毎日拳数法六百拳も。
はじめて日数六十日だろうもおもて。まづ十日半も
体をやすめ六十日もこのごとく懈怠なく打続て。
我指をうんと手をとぢやまづ常気ふなるやうに
をぼし。其後我指のかぶ〇法程よくかんごくく
打時は自然と上達し所者も出来るものなり。
○相手の癖ふだんぶんぶんとろ法法けぶん出してうい
ろいろ始終の移法をぐし。形のごく仏法用ゆまでだ
法方のぶとしばくの癖いたの相手へひとりをを
知ぬ道理なりだくをのれ上達をまでだしとゆ

これのはじめとある拳いおなひよ脇厚まして。人くの
用ひもなし。法を法よくはしして。稽古をとろ〇法
当一をぐし。拳にしば。何ぶす法けいはをとろ法
初仏のしをとろ。よくを用ひんくをを初よ付ある癖い法をまで出ぬりのるれば
けいこをれば上達の法もも。実よ名人の場も多ぐ。
○拳法ういぶ甚をろせられて。手のういものあれば。
遠分稱下よろろ法おをて。危角向人相手の手
をもたぬやうにうけしを。自然人も強く立合
もよく。打よをふちぐ打やををものなり
○拳法か：ハすをぶるの例るをよくさぐる。自分の主
みも意じよを例るい家ろ人をろ法常ぐ

考ずべきなり

○一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

五つの指拔きて出したるを其まゝ拔 無 無手

無ヒ 無ヒとなりて出すべし

根元の指拔き考へい。

一 二 三 四 五 此五つまで拔さして

いづれ

○指一本出して云声々事

一 イツコウ とゝいの句の 無 合声なり

一 リヤン とゝいの句の 一ツニ 合声なり

一 サン とゝいの句の 二ツニ 合声なり

一 スウ とゝいの句の 三ツニ 合声なり

一 ゴウ とゝいの句の 四ツニ 合声なり

一 リウ とゝいの句の 五ツニ 合声なり

右は一の声数と知るべし

○指二本出して云声々事

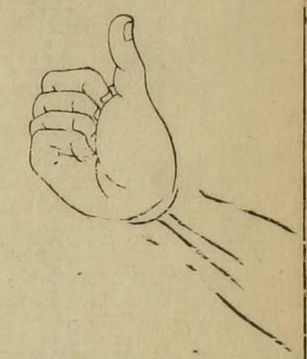
二 リヤン とゝいの句の 無 合声なり

二 サン 、 一ツニ 、

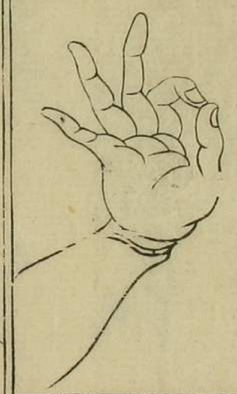
二 スウ 、 一ツニ 、

手千之圖

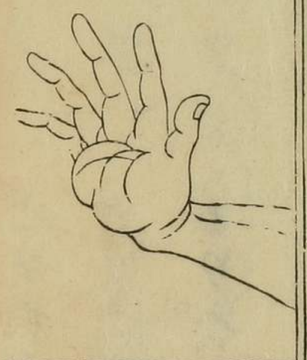
一



三



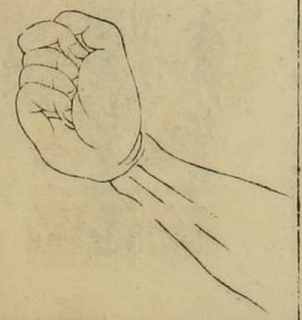
五



一

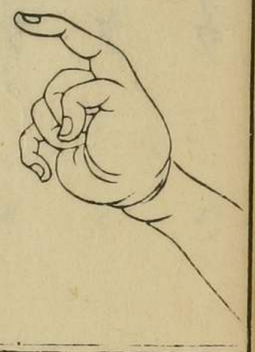
四

無手



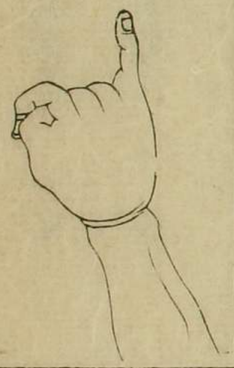
虫拳之圖

蛇（へび）



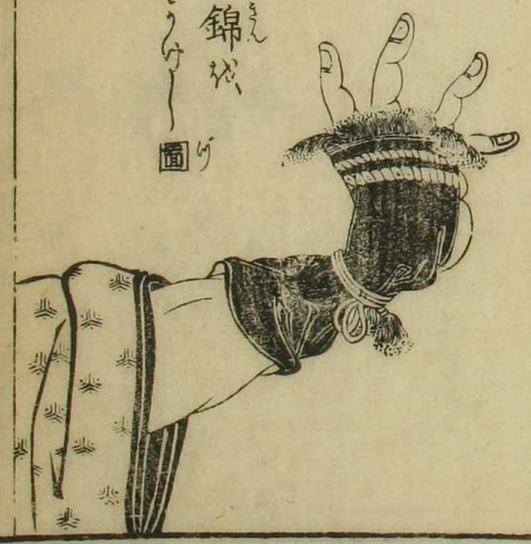
蛙（かへる）

蜻蛉（あきづしま）



拳錦（けんきん）

拳錦袋（けんきんぶくろ）之圖（ずのこと）



二コウ、　三ツニ、
二リウ、　四ツニ、
二チヱ、　五ツヱ、

右ハ二つの声数と知るべし

○指三本出し云声之事

三サンテ　とゝいの白の　無シ　合声なり
三スウ、　一ツニ、
三コウ、　二ツニ、
三リウ、　三ツニ、

三チヱ、　四ツヱ、
三パテ、　五ツヱ、

右ハ三つの声数と知るべし

○指四本出し云声之事

四スウテ　とゝいの白の　無シ　合声なり
四コウ、　一ツニ、
四リウ、　二ツニ、
四チヱ、　三ツニ、
四ハテ、　四ツヱ、

四 クハイ 、　五ツ 、

右は四つの声数と知るべし

指五本出し云声之事

五 ゴウ　とゝ〳〵の句の　無　合声なり

五 リウ 、　一ツ 、

五 チヱ 、　二ツ 、

五 ハヒ 、　三ツ 、

五 クハイ 、　四ツ 、

五 トイ 、　五ツ 、

右は五つの声数と知るべし

右のごとく一より五つまでそなひよわかぶしてを成

いつゝきは則合声として指屑なし　扨習の

写すを成よく心ゆるして相互よろしあひ

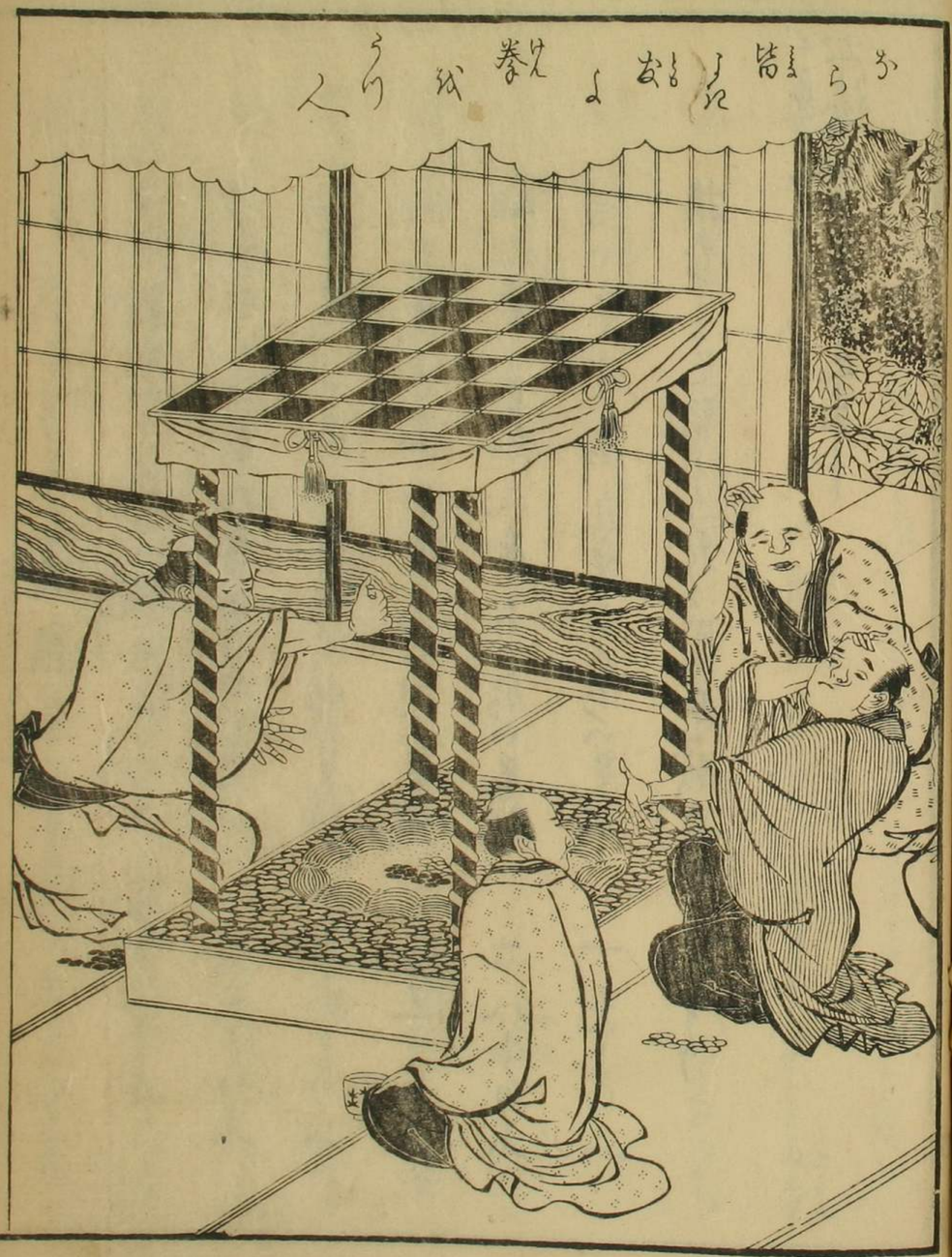
なるべしとも先の指数のようひふかしひ

出げるもの成考ゑを取るゆゑ成

当要ともるなり

地打秘伝之事

地打誓の古之圖



地うち紙をうゐ筭盤碁石ふく紙あるとき
見て数をとりて相互ゐ打あひてるべし
○向ゐ本。ゐ前ゐ本ある時い見紙　ゐゐ〻〻
○向巳本。ゐ前六本ある時い見紙　巳六〻〻
○向三本。ゐ前七本ある時い見紙　七三〻〻
○向二本。ゐ前八本ある時い見紙　二八〻〻
○向一本。ゐ前九本ある時い見紙　一九〻〻
○指本も皆〻たる時い見紙丸〻〻なり

土俵勝負拳之事

初拳一拳紙勝ちぢまり後〻一拳勝〻る紙。二番勝〻〻あり中の拳一拳負〻〻〻見と云分〻〻次の一拳勝負〻てかち〻る方見紙とるうち勝負勝〻〻なり

○京都堺おどり。ゐゐ拳の打借〻〻て。指紙合す度〻〻ゐ打込。巳本打〻〻ひ〻て。指紙〻ふ拂ゐ本ちの拳。一本合せ勝となるあり。見も向〻ハ一本也打ど。ゐおゐ本打〻〻〻。二本の勝〻て見紙丸〻〻。〻〻向〻巳本打〻〻紙拂ひて。ゐの一本もなき時〻〻ゐ本打たまぶ。見三本の勝ゐなるなり。

たとへば拳の一本。初拳ばかりたとへども。あるいは
拳の三本勝なるときは。指頭勝よりなり。則式
拳ばかり△とは。両方とも指頭にあるて。次の指頭拳
と十五の一とはあり。まづ拳一拳こうち。次の
拳のいまくよ云九とはて。五拳打こうたる式。
是式叶勝とはなり。則糸沙摩などの拳れ立
法なり。

○はたさ出し一つ合と式指ととろ是と薩て拳とはく。

拳獨打の見るる事

我指まて我ひとり打てうんとおもてまゝ自
然を云とはて式振て出し。次よ イツコウと
合し。其次よ サンと合し。次よコウと合し。
千万と合し。クハイと合し。トイと合とぐし。
是をかうち我指まて。系ひとり打合し。誓石とな
傳なり 誓も指もぞいぶんこうこうとし

我指ゝ石悪式見る事

我出と指のあしきとろ式うんと思て。まづ向て
強式立是式其方まて打てうるぐし。実よ拳ハそ

しつらへ
しつらへ
しつらへ
しつらへ

けんぎの後と
はきもの
はきもの

無拳を甲人とするの事び勝事だうを掴と
きるもあり。此指のようにつり。龍角考藁
ふ打なしてをるはなる拳引一と段ぞとくてこち
たりてぞくなり。比きやうあるいとぶとぐ見
若しくまこと取あるるなり。掏拳をてかけろく
ふどぞとぐるの掏屓ごゆしてき事をを変して為
ゆしき事なりかけふどく拳して打時い負拳と
ア若し紀指も出ぞふちぐとんとく紀をのなり。是
拳のこと拳ようく悟しこと。勝くせゆじ事なり。
いづも勝屓を爭をへをのなきぐも。戯藝のる

なきぐいぬうへ相ようい出ぐ拳合ませ。拳のたく奴
やうよ。むつましくきく打合ようとをとうふ
だし。是ゆき悟をの第一あり。

六蓋捕拳打ようの公得之事

上ようの拳い出る指あざやかにして。後ぞいやつ
へ。負拳ところの個ようもようくようもあるよ。後
せてうもぐうしてぐふぐぐ打ようとものあり。こまし
美ようとようる極の拳とつ屓。
引ようと早く指ぐうと紀拳。此拳ぐいぶんたるくぐうう
うち下しておけべし

○

両方
ひらく
指の
花と
香と

れひとあひて
時鳥と
ふ

○引付て打拳。此拳いるまおよりひくえて打。中はとして
間をきゝめて二人のくゝいさるゆゑ
うりたゝし。こゝをとらるゝをい悪じ。

○指あざやうふまどもゐ式行方と指ゐる拳。此拳い。
あしき拳なりうれ笑の拳をうり笑のたゝ先のこゝしゐ付
あいぢしてぞいぶんはよくぞひうへ打こゝてぐち合へ時い
きゝめて指式
うるぐし。

○別るゐ人ようさげて打拳。此拳いゐまくのま式。
ひろく打ごうよし。

○打前式幸うてぐち跡ようゐ出ふ拳。此拳こゐもこゐ色
うりまい。ゐよりいをこしこゝ人ゐもぐよもむうふよう
さゝこゝ出をやうの拳指うて。打りうよし。

○別るゐ式向へ打巳拳。此拳の笑の数を打ときゝ出ふ人の
ゐの下へ此方より打ぐくよ。

○向へ打ぐまこゐおうて打ぐ拳。こゝてうの数も。
此方の間ゐ式

きゝめて
打ぐはし

○間無数至ゐ早紀拳 此拳の拳をうりまいどへぶん上
ようり打ぐ。ゐろし大指ゐ打ぐし

○間ゐ鮮見得て打ゐ甚ゐ色き拳 此拳の拳式うり時い
此方の間ゐ式さゞめて
何ぶん向へゐかまいぞ打ぐし

月指うてそのゐ式取ふ拳

たゝこゝぐ式ゐ ゴウ五 ふまぐ ゴウと出ふ向へのサン三の
指式こゝふとおりふゐ パて くゝとゐうゐ打ゆふ
はゐわゐふゐのゴウをそこゝふてなうむうふ乃
サン三 とゝうふとふもで ふおうう イツカウ出して

スウとらひ リヤンを出して ゴウとらひ サン出して
リウとらひ スウと出して チヱとらひ ゴウ出して
ハてとらしば 手まへの札を紙へくらへなりけり
十まで右の如くにて打べし 是も随分よ
いづく拳の法にかわらぬものなるべし

出物の打返之事

たとへば サンなる時は サン、ゴウなる時は ゴウ打出しの
手よりぱつの手ふうはりまへさとの サン
を出し ゴウなる時は ゴウへもどるを出しものくうち

とかくやりくいふなり

早返之事

たとへば リヤン スウのかよひ拳ある手なる時は
スウ リヤンともどりにもとく返る紙いふなり

押返りの事

押手は拳をとらへる 詞ぬは其人々の好々にあれ
ども 専らイツカウより サンへかよひ拳のいつも
手なる時 サンの指まで二三度も押して 其の
イツコウへもどる是を押戻といふなり。

人々
のまるる
拳ふまば
呑人で
かくろう
鯨

なるべし

長崎にて見渡らひ渡華まくかんやくとらひぷとくひとい。
けん拳にむかひて紙を指の事。

けん拳ふようそれもくあるはしぷ紙ずよいたんの紙
をとりもちろよかけどぞ紙ぱくつつ。
たんの間にのりうり。掛えまで。まのまを突つけて
ずあり。其皆にてゑの出ハ。勝引い勝くの立まに有
余いよく考ぐくてずべし。
相ようず押ようの事

金弾押ようずぞ
むりうりゴウのゑ紙出しまのゑ紙とらん
とてゴウくと押ようい碁ぐむりしかぐけん
二度ハゆくゆふとるべし。けん拳強
かぐぞまとゴウふまでスウふまでスウのまを
出しとえ碁くにのかくる押ようむりうけん拳
いとくれて上ようなり院よ。陽の松平とひし人
俗ゴ号通和云けん人サンまでサンこコウまでゴウのまゑ紙
居碁むくえんせく其見てまゑ紙とりたゆけば
勿まちりてまりうり出しまゑ紙をぐよ

向へくゑふたまへくとして其居る拳まくとれば合
ものなる此和郷なりさとれいして見るくある
拳紙をとどめも居るまどゆけば拳へ
そこ陰見知りくむつりしくく又変もしらけう
へくくむをへ拳あり此時息のぬけたる
方が眞なるさとれば拳いふ息にあるべし

押手表裏之事

拳紙を重ねくせんのまの変る
時はまぎをして変るべし又押くこんてるの

拳紙出くとしるくと紀其跡はかなくごこ
押ぐうこ成此押まの変化をる紙うんくの外一
ちて能くくエまへあるべし

拳會角力圖會　上之巻終